S. Ashina

＜前回＞オリエンテーション
前期：キリスト教と近代的知
後期：方法論的考察と聖書の社会論
　オリエンテーション

Ⅰ：象徴・言語・システム

１．象徴・言語１
２．象徴・言語２
３．象徴・言語３
４．システムと宗教

Ⅱ：レトリック・メタファー

１．レトリック・メタファー
２．メタファー・モデル
３．イエスの譬え

Ⅲ：コミュニケーション・解釈

１．伝統と意味の地平
２．多元性と対話
３．イデオロギーとユートピア
（１）意味世界の転換とユートピア
（２）ピューリタニズムと民主主義
１．一七世紀のイギリスにおけるピューリタニズムと近代民主主義との関係。
２．パトニー討論とその意義
・「パトニー討論」（1664 年 10 月 28 日から 30 日）と法哲学者リンゼイの解釈
　革命の中、軍隊の急進派から出された「人民協約」（An Agreement of the People for a firme and present Peace, upon grounds of common right and freedome）の審議のため、ロンドン郊外のパトニーの教会堂で開かれた軍幹部会議が開かれた。
・ピューリタン革命：絶対王政と共和制という政治システムをめぐる戦争であると共に、イギリス国教会制度とピューリタニズム（これには、多様な宗教的主張が含まれるが、国教会制度を越えて宗教改革をさらに推進するという点では一致していた）という、宗教的な意味根拠をめぐる闘争でもあった。
４．宗教的な根本理念（意味根拠）のレベルにおける選択：絶対王政と国教会制度を支える階層的秩序か、宗教改革の万人祭司（神の前の平等主義）か。、というだったのである。
　軍幹部（クロムウェル、アイアトン）とレヴェラーズ（レインバラ）との間の成人男子普通選挙権などをめぐる討論。
　リンゼイ：パトニー討論に表れた民主主義の三つの基本原理を概観することによって、ピューリタンの宗教的精神性（意味根拠）と民主主義（意味世界）との相互関係。
５．同意の原理：レインバラ大佐（レヴェラーズの代表）
６．民主主義：主権者としての国民の同意が必要。国民の普通選挙権の要求。

７．討論の原理：同意は討論の結果到達されるものであって、決して討論の前提ではない（クロムウェル）。
８．討論の原理は、「キリスト教の集会の経験」（リンゼイ、1964、32）に基づいている。
10. 集いの意識は、ピューリタンの集会という「宗教的民主主義の基盤」の中で体験されていたものであった。

（３）イデオロギーとユートピア

前近代から近代へのシステム転換に関して、キリスト教が積極的に関与できたのは、キリスト教が自らの内にイデオロギーとユートピアとを動的かつ有機的に統合し得ていたからである。そこにおいては、一方で、既存の意味世界の諸領域との動的連関が確保されており（状況適合性→しばしばイデオロギーへ偏る）、他方で意味根拠への志向性が確かな仕方で保持されていた（自己同一性→しばしばユートピアへ偏る）。それは、一七世紀という時代状況においては、自律的理性の圏域である意味世界とその宗教的意味根拠の次元とが、まだ分離せずに、キリスト教的宗教において統合されていたということに他ならない。

IV ：宗教と文化———構造と動態

＜今年度の特殊講義のまとめ＞

A．前期

キリスト教と近代

・啓蒙主義以降のキリスト教自然神学の可能性（マクグラス）
・近代キリスト教と古典的ドイツ思想（ティリッヒ）

B．後期

・言語論、象徴論から、キリスト教思想へ。
・意味、システム、宗教

（１）意味世界と宗教——共時的構造的

１．意味世界の構造

言語・システム：意味と指示

記号：「観念／イメージ」の結合（結合の生成は恣意的であるが、生成した結合は、自然的である。）

意味＝記号間の関係性（差異と類似）→意味は意味連関・システムである。

「記号相互＋記号全体」における構造

意味の形式的規定・形式→「文化」

指示＝記号世界外部（事物あるいは経験、あるいは超越）への関係性

実在論あるいは非実在論

意味世界は恣意的構成（心理的・社会的、あるいは歴史的）であるとともに（→現実・実在は構成である）、実在へ準拠している。

S.　Ashina

２．意味世界と意味根拠　→　宗教と文化

・意味連関内部での根拠付けと意味連関自体の無根拠さ（→存在論的な不安）

・人間の住む意味世界の無根拠さについては、20 世紀の多くの哲学者が指摘するところであるが、たとえば、ハイデッガーは、「世界の指示性と非指示性の二重性」という観点からこの問題を展開している。つまり、世界は、内世界的に手許に有るものの意味連関の分析から出発するとき、指示性という構造を顕わにするが、不安において開示される世界の相は非指示性として特徴づけられる（辻村公一『ハイデッガー論巧』創文社、1971年、77−80頁）。世界は、このような二重性によって理解されるのである。これは、「『彼のために』(umwillen seiner）といふ規定性が『彼自身の無』すなわち『死』といはば背中合わせになつてゐることに基づいてゐる」（辻村公一、1971年、88頁）のである。

・「意味の地平」と「地平の彼方」との関係（上田閑照『ことばの実存　禅と文学』筑摩書房、1997 年、9 頁）。

世界：さまざまな意味連関を統括する「意味の総枠」、包括的な意味空間

人間：世界をなす意味連関を理解しつつ世界内存在する。

↓

場所・地平（経験・理解の地平、言語世界）

地平というメタファー：限られたこちら側が開かれるということで、その「開け」の中に入っているものだけが私たちに見えてくる。私たちの立つ地点からのパースペクティブ。

「地平の彼方」：地平の可能性そのものの制約、彼方のない地平はない。

↓

二重性：私たちが「於いてある」世界は二重になっている。「深みの次元」

・指示の二重性（第一度と第二度）とメタファー機能

言語の超越機能・形態化機能

素朴　→　素朴さの喪失　→　第二の素朴

近代以降に人間は宗教的であり得るか。

・この宗教の概念規定をめぐる諸問題――イメージ化を通したパラドックスの解消としての宗教、広義と狭義という宗教概念の二重性などを含めて――については、次の文献を参照。

芦名定道『宗教学のエッセンス』北樹出版、1993 年。

『ティリッヒと現代宗教論』北樹出版、1994 年。

・連関、場、地平としての意味世界は、意味根拠を要求する。

論理的に、また存在論的に。

↓

広義の「宗教」：意味世界の根拠づけ機能

意味根拠は、経験との関わりで、イメージ化・象徴化。

意味世界の内部と外部という構造が帰結するパラドックスとその解決

↓

狭義の宗教（神・霊・超越）、意味根拠の象徴化

３．宗教と文化、宗教の両義性　→　「文化の神学」の構想

・すべては宗教的である・あり得る。→宗教の普遍性

「宗教は文化の内実であり、文化は宗教の形式である」（ティリッヒ）

・宗教は文化的である、あるいは文化の一部である。→宗教の特殊性

↓

政治・経済・科学・文学と宗教という問題設定

ティリッヒ：形式と内実、問いと答え

４．上田閑照『ことばの実存　禅と文学』筑摩書房、1997 年

ことばと禅

ことばと神秘主義

ことば――あるいは実存と虚存と

ことば――その「虚」の力

経験とことば

場所――見えない二重性（虚空と原世界）

場所とことば――虚空／世界における「対―話」

「彼一語　我一語　秋深みかも」

連句形式と禅問答

山頭火と放哉――「自由律俳句」詩人と仏道

わが『道草』の道――「私の個人主義」と「則天去私」の間

夏目漱石――「『道草』から『明暗』へ」と仏教

（２）意味世界の転換と宗教――通時的歴史的

５．意味と欲望、意味世界の転換

象徴：言語と欲望、意味と非意味　→　メタファー（リクール）

６．意味世界を構築し転換する内在的な要因としての欲望

↓

意味世界は生成・消滅し、変換する。

イデオロギーとユートピアと、宗教的次元（意味根拠の二重の機能、正当と転換）

二つの知恵

７．意味世界（システム）ＡとＢ、意味根拠 a と b。

S. Ashina

転換：Ａ→Ｂに際して、意味根拠は競合する諸意味世界に対して、正当化と転換（批判）という二重の機能を果たす。

意味根拠の正当化機能＝イデオロギー、転換（批判）機能＝ユートピア

宗教は、本来イデオロギーとユートピアの二重性において機能しているのである。

a はＡを正当化し、b はＢを正当化しつつＡを転換する。

保守と革新とは相対的概念である。

「宗教は、現状の秩序を維持することに限らず、革新的な制度の導入をも正当化するために用いられる。『ローマ史論』は、その豊富な実例をあげている。こうしてマキャベリは、宗教の社会的機能と基本的重要性とを認識したのみでなく、それを一般的に理論化することも試みている。」（宮田光雄『国家と宗教――ローマ書十三章解釈史＝影響史の研究』岩波書店、2010年、123 頁）

８．意味世界を構築し転換する意味世界外的な要因？

「マイステル・エックハルト」、「一切の恵みを超えて」「象徴によらず直接性に於いて」（波多野精一『宗教哲学』（全集五）、236頁）

「神が彼の為めに残して置いた一点に於て、彼は自己へと転回をなし、かくして自己を被造者として認識する。魂は創造者の底まで探り当て得ぬのである……と。神と合一した魂は、実は、神に於て失った自己を神よりして再び授かる被造者なのである。自己が無に帰したるを知る自我は、創造者より一切を恵与されたるものとして自己の実在性を知る。「神に成る」といふも厳密の意味に於ける直接的同一性を意味し得ぬ。神の中には底の底がある。魂は底の底まで達することも究め尽すこともなし得ぬ。神との合一は畢竟自己の無に等しきこと、自己の有限性の体験に他ならぬ」、「神秘主義より人格主義への転回の必然性」（237）

↓

神の底：欲望の底と通底？　内在的超越？

神の底の底：内在的超越の底、内在的超越の超越

エックハルト解釈としての妥当性は？

＜次年度・特殊講義へ、金３＞

キリスト教と社会理論の諸問題（２）

本講義は、昨年度より開始した「キリスト教と社会理論の諸問題」をテーマとした講義計画（後５年程度をかけ、体系的な議論を展開することを予定）に位置づけられるものであるが、今年度は、昨年度の講義内容（近代キリスト教思想の状況、象徴論・言語論を中心とした方法論的諸問題）を簡単に確認した上で進められる。前期の講義では、この昨年度の議論に基づく、宗教哲学構想（近代以降の思想状況における宗教哲学）が示される。波多野、ティリッヒ、リクール、ヒックらの思想に留意する。後期の講義では、宗教哲学構想の射程を具体的に論じるため、「経済と環境」をめぐる諸問題が取り上げられる。

以上が、本年度の講義内容の中心となるが、時間が許す範囲で、聖書の社会思想（民族、政治、経済、法など）についても、基本的な考察を行いたい。

↓

前期：言語論・象徴論から宗教哲学へ

波多野、ティリッヒ、リクール、ヒック

後期：「経済と環境」

＋

聖書の社会思想